

(世) 新音楽学会関西支部だより 第9号 1991-04-05

Newsletter of the Kansai chapter, Society for Research in Asiatic Music

これはとうようおんがくがっかいゆんさいしふだよりですこれはとうようおんがくがっかいゆんさいしふだよりですこれはとうようおんがくがっかいゆんさいしふだよりですこれはとうようおんがくがっかいゆんさいしふだよりです

定例研究会のご案内

関西支部第153回定例研究会

と き 1991年4月20日(土) 14:00~16:30
ところ 大阪音楽大学K号館403号室(以前「水川記念館」と呼ばれていたところですが、現在は「K号館」という名称に変更されました)
交 通 阪急宝塚線庄内駅東側より阪急バス22系統「上津島」下車

14:00~15:30〔連続講座〕“研究の過去・現在・未来”
シムポジウム『資料とフィールドワーク ——中国音楽研究の場合』
パネリスト: 井口淳子(大阪大学大学院)・岡部芳広(神戸大学大学院)
朱 家駿(大阪大学大学院)・田中伸子(大阪音楽大学大学院)
仲万美子(大阪大学大学院)(50音)

司会: 岩井正浩(神戸大学)

——休憩——

15:50~16:30〔研究発表〕
『四万十川上・中流域のくらしと音楽(2)』
——高知県大正町下津井地区』(神戸大学岩井ゼミ共同研究)
発表者: 黒田彩子・寺井智子(神戸大学大学院)
司 会: 酒井 諄(相愛大学)

企画調整(岡部芳広・由比邦子・渡辺浩子) 会場(渡辺浩子)

関西支部第154回定例研究会

と き 1991年6月15日(土) 14:00~16:50
ところ 大阪大学豊中学舎 文法経講義棟13号教室(視聴覚教室)
交 通 阪急宝塚線石橋駅(新幹線・圃場約20分)下車、徒歩約15分
または阪急宝塚線螢ヶ池駅よりタクシーで約5分

14:00~15:00〔研究発表〕
『杭全神社の地車』
発表者: 宮川紀子・岩尾典子(大阪音楽大学民族音楽研究室)
司 会: 渡辺浩子(大阪音楽大学)

——休憩——

15:20~16:50〔連続講座〕“研究の過去・現在・未来”
『フィールドワークに問いかけられているもの』
田井竜一・廣井榮子(大阪大学)
司会: 網干 毅(大阪音楽大学)

企画調整(岡部芳広・渡辺浩子) 会場(高岡結貴)

第153・154回ともに開催場所が、先号に掲載した予定と違っております。ご注意ください。

第153回定例研究会連続講座 趣旨

中国音楽研究は近年、内外の研究者によってこれまでになく活発に行なわれているように感じられる。対象もかつてのように伝統的芸術音楽のみにとどまらずさまざまな音楽文化に広がり、研究方法も文献資料を中心にすえた主として歴史学的研究から、実際に「音」のある場に赴き共時的な記述を行なう——つまりフィールドワークを主たる手段とする民族音楽学研究などが新たに加わってきている。

今回はこのような中国音楽への多様なアプローチのなかで、(大陸の場合)近年ようやく可能になったフィールドワークと、中国に関わるかぎりどの様な対象であれ方法であれ避けて通ることのできない「資料」(とくに書かれたものとしての)をめぐる問題とを取り上げてみたい。

ここで言う「フィールドワーク」とは、元来、西欧人による非西欧の無文字文化、未開社会を対象とする人類学、とくに文化人類学、社会人類学において磨かれてきた研究手段であった。そして、このような西欧と非西欧との間には厳然とした文化的距離が存在していたといえる。しかし日本と中国との文化的距離はそのようなものではない。この両国間の特殊な関係をふまえて、過去と現在の、また中国人、西洋人、日本人によるそれぞれのアプローチをもう一度見直してみたい。さらに、中国におけるフィールドワークの特殊性として、「資料」に関わる問題を取り上げてみたい。たしかに現地に赴きそこで暮らす人々とじかに接しかねるの言葉を「資料」とすることは中国のような従来歴史学の対象となってきたような国においても「可能」である。しかし、中国においては文字資料の極めて乏しいといわれる農村においてすら歴史書や現地の人による研究書や諸々の記録が存在しないなどということはない。このような状況は当然、中国文化が「書かれたものの文化」という側面を強く持つことに拠るのである。現地の人々の「言葉」と書かれた「資料」との間に横たわる問題はさらに、何を「資料」と考えるかというより大きな問題を提起することになるだろう。(井口淳子)

第154回定例研究会連続講座について

フィールドワークそのものや、その背後にあるものが抱えている諸問題について、田井竜一氏、廣井榮子氏に発表していただく予定です。田井氏にはオセアニア地域のフィールドワークの事例から、廣井氏には日本の民俗芸能の調査を事例に問題を提起していただきます。今号に掲載されている「フィールドワークレポート」の内容が、その中核になると思われますので、あらかじめお読みおきください。(編集室)

今後の定例研究会開催予定、および発表の公募

第155回(予定)	1991年 9月28日	国立民族学博物館	発表申込締め切り	7月10日
第42回大会	1991年10月25日~27日	龍谷大学		
第156回(予定)	1991年12月14日	相愛大学	発表申込締め切り	7月10日

◆申込方法

連続講座・フリーの別、発表の種別(研究発表・調査報告・資料紹介・研究演奏の別)発表題目、使用希望機器、希望日、所属、氏名、連絡先、を葉書に明記の上、下記宛てにてご送付ください。申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともありますのであらかじめご了承ください。

◆送り先

〒657 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学教育学部岩井研究室 東洋音楽学会例会係

1986年から関連分野の研究者と共同で行なった民俗芸能の調査報告書が近く刊行される(『奈良市民俗芸能調査報告書』1・2巻、編集；奈良市教育委員会)。この間に、行政と文化の関わり、あるいは調査方法をめぐって改めて考える機会を得た。まだ充分整理できていないが、少し書いてみよう。

民俗芸能の「調査報告書」を手にとられた方もおられるだろうが、これは自治体が民俗芸能の保護・保存のために現状を把握し、何年かに一度、出版物として発行しているものである。一般に、書式は縦書きで、内容は概観に始まり、歴史、芸能、詞章とすすみ、最後に音楽の項目が設けられている。採譜した楽譜を載せるためであろうが、この項目は最終頁から横書きで書き出されることが多い。どうも、この部分だけが「孤立」しているように見える。また、ある芸能の調査時に、複数の調査員がその芸能のパフォーマンスとしての面白さを伝えるには、従来の枠組みでは収まりきらないと考えたとする。けれども執筆の段階では、既存の分類項目に当てはまるように、輪切りにして書かねばならない。これでは共同調査の意味が見いだせないし、ここからは最低限の情報を得られても、書かれた文字からは何もたちのぼってこない。相変わらず、行政と研究者の身勝手な書き物としてしか読者の眼には映らないのではないだろうか。今回の報告書では従来の意識とは違った視点からのアプローチを試みたが、様々な制約もあり、課題がまだ残されている。こうした報告書の問題ひとつを取り上げてみても、私たちの調査は様々な問題をはらみ、至る所で見直しを迫られている。

さて、皆さんはどの様な考えをお持ちでしょうか……。

フィールドワークに問いかけているもの

田井竜一

フィールドワーカーはもはや「英雄」ではない。少し前までなら、誰も行ったことがない場所の珍しい音楽芸能の記録を持ち帰り、人々の興味を引いたり賞賛を浴びることも多かった。しかし現在では、その気になれば誰でも世界中どこにでも足を踏み入れることができるようになり、一般の人々が直接そうしたものに接することが可能になったので、フィールドワーカーの「権威」は相対的に低下するばかりである。

それだけではない。人類学者や民族音楽学者の多くが従来フィールドにしていた、いわゆる第三世界といわれる地域の側から、近年フィールドワークについて様々な懐疑や批判がだされるようになってきている。そこではおもに調査の手続きや調査倫理、研究内容やその成果の現地還元、および書法に関する事柄が問題にされている。第三世界からのこうした声は、単にブラクティカルなレベルのものに留まるのではなく、フィールドワーカーの姿勢、ひいては調査研究それ自体への根源的な問直しを迫っているように私には思える。私達は真摯な態度でそれに答えるためにも、今一度根本的な事柄に立ち帰って考える必要があるのではないだろうか。

これからのフィールドワーカーには、①調査資料を利用しやすい形で当該文化に還元すること、②地元の文化センターやコミュニティー活動に協力すること、③文化の担い手自身が独自の調査活動に従事できるように、トレーニングや研修のプログラムを共同で企画すること、④専門知識を必要としない教材を開発・制作すること、⑤当該文化の正当な理解・評価を目指した「知識と体験」を広げるための活動を、教育機関や一般社会で展開していくことなどが要請されよう。

だが、果してこれで十分であろうか。ソロモン諸島のテモツ州知事が私に語った、「私達が本当に望んでいるのは、録音されたテープなどではなく、伝統の伝承と発展に本当の意味で役立つ事柄なのです」という言葉が、私の頭の中をしきりによぎってならない。

沖縄地区情報

沖縄地区では第2回定例研究会を1991年2月23日(土)に開きました。

研究発表「宮古狩俣の神歌——旋律構造の視点から——」狩俣康子

講演「北部タイ少数民族の生活と音楽」内田るり子

沖縄地区の会員中村透さんが文化庁創作奨励賞を受賞なさいました。沖縄における、伝統文化を踏まえた新しい現代の作品創造の先頭に立っている中村さんの受賞は、私たち沖縄地区会員の喜びとするところです。

沖縄地区連絡会では例会毎に「沖縄地区通信」を発行しています。「沖縄地区通信」には次回例会の案内(発表題目・概要)と前回例会の記録(発表要旨・質疑応答の記録・講演等の要約)、その他の情報が掲載されています。入手をご希望の方は、62円切手10枚を添えて沖縄地区連絡会事務局あてお申し込みください。向こう2年間、郵送いたします。

〒903 那覇市首里当蔵町1-4 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽学学科室内

東洋音楽学会沖縄地区連絡会 098-831-5034(鍼)・5044(久邇) (金城 厚)

お詫びと訂正

支部だより第8号に掲載いたしました新役員紹介の中で、参事の尾野尉子さんのお名前に誤りがありました。ここにお詫びいたしますとともに訂正させていただきます。

編集室より 第9号編集担当 個部芳広

第8号を送ってほっとしたのも束の間、もう第9号をお届けする時期になりました。前号では誤りがあり、大変失礼いたしました。今後、そのようなことがないように留意いたしますので、お気づきの点がございましたら、どうぞ遠慮なくお知らせください。

第153回および第154回定例研究会の会場は、支部だより第8号でご案内した会場から変更されております。どうかお間違えのないようお願いいたします。

今号より、「フィールドワークレポート」というタイトルのエッセイを毎号掲載していく予定です。諸民族の音楽に関する研究にとって、フィールドワークは大きな意味をもっています。私たちは、表面に現れてくるその成果については日頃関心を寄せていますが、その成果を支えている内側の諸事象、また、内在する問題点についてはあまり意識していないのではないのでしょうか。この「フィールドワークレポート」を通して、フィールドワークのあらゆる側面にスポットを当て、その全貌に迫っていきたいと考えています。もちろん、広く公募する形で原稿を募りたいと考えていますので、フィールドワークの経験の程度によらず、それぞれの立場で自由にご執筆ください。フィールドワークに関する内容でしたら何でも結構です。800字程度でお願いいたします。

支部だよりでは自由な投稿も歓迎いたしますので、ふるってご投稿ください。送り先は研究発表申込と同じく、神戸大学教育学部岩井研究室です。

お忙しい中原稿をお寄せくださった皆様、どうもありがとうございました。また連絡、通信などでご迷惑をおかけした方々もご協力ありがとうございました。

支部だよりの発刊予定は次のとおりです。

第10号 1991年9月上旬発刊予定(9月・12月定例研究会案内)原稿締め切り 7月10日

支部関係の問い合わせ先

関西支部 〒559 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学音楽学合同研究室内

☎06-612-5900 内線331

定例研究会・支部だより

〒657 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学教育学部岩井研究室

☎078-881-1212 内線7238